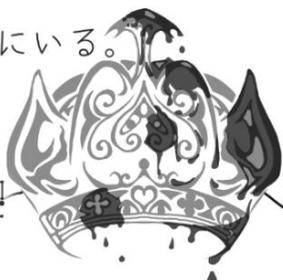


神様は、今日もそこにいる。

返事のない星



0%を信じてよかった

どうか俺に騙されたままで

せせらぎ

悪夢だとしても、
あなたに会えたから

今日も

世界に音が多すぎる

189

せせらぎ 一八九号 目次

ずっと、好きだから

銀平糖

……

2

神様になった少年の話

ラギ

……

3

返事のない星

神楽坂

……

12

身代わり姫と傀儡王

阿野^{あの}

二柘^{にます}

……

14

愛しい悪夢の中で

あきつさ

……

21

思い出のお城

銀平糖

……

29

おかえり

幻想翡翠

……

33

一蓮托生

みみず

……

38

ずっと、大好きだから

銀平糖

私はママのことが大好き。

だってね、私のママはいつも優しいから。

そしてね、私のママはとっても綺麗なの。

お料理も上手で、ママの卵焼きは世界一。

いつだったかな、ママがパパと出かけて行ったの。

その日、ママとパパは暗くなってるから帰ってきたんだ。

ママはとっても悲しそうな顔してたの。

それからママとパパはよく二人で出かけるようになったの。

パパは毎回その日のうちに帰ってくるんだけど、ママは二、三日してから帰ってくることも多かった。

段々と出かける頻度も多くなってる、それに合わせて、ママが帰ってくるまでも時間がかかるようになった。

長いときは一週間くらい、ママは帰ってこなかった。

ママとパパがいっぱい二人で出かけるようになってから、大体一年。

ママとパパが出かけて行って、私はいつも通りママの帰りを待っていたの。

でも、一週間、二週間、三週間経ってもママは帰ってこない。

四週間と三日経った日、パパが「ママに会いに行こう」って言った。

嬉しくって、お気に入りの桃色のワンピースを着ようと思ったんだけど、パパが「だめ」って言った。

仕方なくパパに言われた服を着ていった。

久しぶりに見るママはとっても綺麗なのに声をかけても無視。

前はあんなに優しくかったのに。

冷たいな。

それからしばらくして私に、いもうとができた。

小さくて、とっても可愛い。

私たちはすぐに仲良くなった。

おままごとをしたり、お絵描きをしたりしていっぱい遊んだ。

私の、いもうとはとっても絵が上手。

おかあさんは、私たちが遊んでいる様子を嬉しそうに見てる。

私のおかあさんはとっても美人なの。

おかあさんは決まって寝る前に私をギュってしてから「おやすみなさい」って言うってくれるの。

それから一人で自分の部屋で寝る。

夜が一番嫌い。

ママが隣にいないって思うと、寂しくなっちゃうから。

でも、お星さまはいつも、私を見てくれる。

そう、だから、きつと、きつと、大丈夫。

神様になった少年の話

ラギ

公園の片隅に、新しいな祠があった。

祠といえば古いものだろうが、それは最近造られたかのようきれいで、妙に目を引いた。建て直しでもしたのだろうか。

木でできた壁面とガラスの嵌め込まれた木の枠の扉、瓦の屋根。

屋根は少し張り出していて、下にお供え物が置いてある。

祠の周りには棒が立てられ、細い注連縄が張られて囲われている。

見たことのない様式の祠だった。

少し気になり、近づいてよく見てみると、祠の扉の真ん中、扉の合わせ目に、何かが彫られているのがわかった。丸く、文様のようなそれは、

「…鷹…?」

円に囲まれた中に、翼を広げた鷹が彫り込まれていた。

見入っていると、

「それが気になるのか。」

突然、後ろから声が出た。

「うわあっ!?!」

驚いて声を上げながら振り向くと、そこには青い髪の青年がいた。

「だ…誰…」

思わず呟いた僕を不思議そうに見ながら、子供たちが駆けていった。

驚きのあまり固まってしまい、動けないでいると、二人組の若者がやってきた。た。

「見たことねー人だな。新しく来た人?」

「珍しいな、お詣りに来たのか?」

「あ…えっと…」

二人組は、青髪の青年が見えていないかのように、僕に話しかけてきた。

そのことに戸惑っていると、二人組は勝手に納得したのか、祠について説明し始めた。

この祠は、かつてこの街を護った生き神様の祠なのだという。

数年前に現れた彼は、とても美しい、青い髪と瞳の青年の姿をしていたのだという。

犯罪や喧嘩の絶えない場所だったこの街は、彼が現れたことでもとも変わった。

何か事件が起これば彼が力を尽くして解決してくれたし、喧嘩が起これば彼が仲裁してくれた。

若くして亡くなった彼の成し遂げたことを忘れない、この地に神様がいたことを思い出し、彼へ感謝し続ける、という意味も込めて、この祠は建っているらしい。

若者二人は僕にそんな話をする、祠に手を合わせて感謝の言葉を吹き、去って行った。

若者二人の後ろ姿を眺めながら、さっき聞いたばかりの話の思い返した。

聞きながら、悲しい話のように思えた。

彼のことを、若者二人は「神様」と呼んだ。

祠は二人だけで建てられるものではないだろう。

少なくとも、街の多くの人間が、彼を「神様」として扱っているだろう。

僕は彼を知らない。

きつと、僕は街の人たちのように彼を「神様」として扱うことはできないだろう。

彼は、どんな人だったのか、少しだけ気になった。

結局あのまま、祠を離れた、のだが。

なんか、青い髪の人が、ついて来ている。

(変な人だ…)

どうしよう。誰かに助けを求めた方がいいのか？

辺りを見回してみた時、少し離れたところからこつちに走ってくるトラックが目についた。

あれ？

あれって…

時間が引き延ばされたように、周囲の景色がスローモーションになって見える。

その時、

「危ない！」

「うわあっ!!」

ぐいっと引つ張られるのほとんど同時に、ハンドルを切り損なったらしいトラックが、ほんの一瞬前まで僕がいたところを掠めるように走っていた。

「大丈夫か？」

前言撤回。やっぱり、いい人だったかもしれない。

「この道はあまり広くないが、スピードを出す車が多いから、気をつける。」

「あ…ありがとう…」

ロードライトガーネットの眼を青く光らせながらさつと僕の全身を見渡し、

「怪我もないようだな。」と彼は言った。

「怖がらせたようだな。…悪かった。」

久しぶりに「見える」やつと出会って、少し浮かれてたみたいだ、と言い、踵を返しかけた彼の裾を、咄嗟に掴んだ。

「!?」

彼が驚いたように振り返る。

なぜか僕の手は、彼の服の裾を、しっかりと掴んでいた。

すり抜けてしまうかと思っていたのに。

「あ…えつと…」

「…」

何も考えずにつかんでしまい、言葉に詰まる。

彼はただ、僕の言葉を待った。

「…君のことを、教えてくれないか？」

やつと出た言葉は、なぜか彼を驚かせたらしかった。

「改めて、俺は人朔日零。この街に住み憑いている、幽霊みたいなものだ。」

「住み〃憑いて〃いる…(引)」

「言っただろ、〃幽霊みたいなもの〃って。まあ、街の奴らは【神様】なんて呼んでいるみたいだな。」

「そういえば、さっきの彼らは〃生き神様〃と言っていたな。」

「ああ…まあな。」

しばし、沈黙が落ちる。

「…慕われていたのか。」

なんと言えばよかっただろう。

「…おそらくな。」

彼の口ぶりは、自信がないようにも聞こえたし、疑っているようにも、申し訳なさげにも聞こえた。

「そういえば、さつき、『街に住み憑いている』と言っていたが、地縛霊のようなものなのか？」

僕の質問に、彼は少し考える素振りを見せた。

「…よくわからない。かつて、街を護るものだったことは確かだが、街そのものに執着しているのか、といえ、そうでもなかったかもしれない。」

「地縛霊と言えば、一般的には死んだ場所とくに縛られるものだが…街、というのも広範囲すぎる気はするな。」

「かと言って、人に取り憑いたわけでもなさそうだしな。…もしかしたら、本当に【神様】として喚ばれたのかもしれないな。」

「そうなのか。」

「…ああ。目を覚ました時、すでに祠のそばにいたんだ。祠の近くにいればいるほど、強い力を感じるし…祠から、なにがしかの力を受け取っていることは確かだろう。」

「街の人々がいつも祈りを捧げているようだし…祈りの力を受け取っているのかもしれないな。」

「そうなんだろうな。」

彼はどこか、寂しげだった。

「…僕のことを『久しぶり』だと言っていたが、これまで見える人はいなかったのか。」

「ああ。ものを動かしたり、夢を見せたりとできることは多いが、俺のことを視認できるやつはいなかった。」

「僕が初めての、君を見た人間ということか。」

彼はふと、空を見上げた。

「…もう暗くなる。この街は犯罪も多いし、日が暮れると一気に治安が悪くなる。もう帰れ。」

いささか乱暴な口調ではあったが、優しさの感じられる言葉だった。

「ああ、ありがとう。」

そのまま歩き出しかけて、ふと振り返った。

「…また来るよ。」

彼はほんのわずかに目を見開き、驚きを見せた。

そして、微かにふわりと微笑んだ。

「…ああ。」

数日後、また別の場所で同じ形の祠を見かけた。

近づいて見てみると、やはり鷹の文様が刻まれている。

落書きだらけのオブジェに囲まれた広場の片隅に、ひっそりと佇む様子は、不似合いだが、どこか馴染んで見えた。

そのまま立ち上がりかけた時、また後ろから声を掛けられた。

「貴方もお参りに来たんですか？」

若そうではきはきとした、しかし穏やかな声。

振り返ると、黒髪の青年と緑がかった髪色の青年、赤っぽい長髪の青年が立っていた。

(カタクリ、黄色の水仙、ハナニラ…あれはネリネ?)

真ん中に立つ黒髪の青年は花束を右手に持ち、人懐っこそうな顔で微笑んでいた。

緑がかった髪の青年は黒髪の青年と同年くらいで、心なしか面倒そうな

表情をしている。

赤っぽい長髪の青年は他二人よりいくらか年上のようで、供え物だろうか、お洒落な酒瓶らしきものを抱えている。

「…君は？」

青年ははつとしたように、慌てて名乗った。

「俺は、大地と言います。鷹城大地です。」

「俺は、霧碧衣や。よろしゅうな。」

「俺は、叶本翡翠。よろしく。…あなたは？」

「…僕は、朔。」

黒髪の青年が鷹城大地、緑がかった髪の青年が霧碧衣、赤っぽい長髪の青年が叶本翡翠というらしい。

「俺と碧衣は、零の高校時代の友人なんです。」

「友人ちゃうわ！あんなやつ！」

「碧衣…」

「なんというか…複雑そうだな。」

「ほら、朔さん困っちゃったじゃん！」

「あんなやつ、はホントやる！」

「まあまあ、二人とも…」

言い争う二人を宥め、話を聞くと、二人は高校生のとき、零と友人だったらしい。

霧くん曰く、「友人ではない」とのことだけど。

父親が有名な探偵で、父の跡を継いで探偵になりたかったという大地くんと、それなりに古い知り合いであるという霧くんが、高校で出会ったのが零だった。

彼は類稀なる洞察力と推理力を持ち、それに加えて特別な「眼」を持っていた。

「「眼」？」

「はい。零は、普通の人間には見えないものが見えたんです。「鷹の目」って呼ばれるほど目がよくて。細かい汚れとかの、単純に小さすぎて見えないものから、幽霊みたいな、スピリチュアルなものまで。」

「それは…すごいな。」

「はい。…つて言っても、幽霊は見たことない、つて言ってみましたけど。どつちかというところ、不幸なことが起きそうな場所が「視て」わかる、とかだそうです。」

「あと、ちよつとした未来予知もできる、つて言ってたで。」

「えっ、そうなの!?俺聞いたことない…」

「そうやつけ？大地もおつたと思っくんやけど…まあええわ。それでな、おばあさんがよく当たるつて有名な占い師やから、なんか才能が遺伝したんやないか、つて言ったらな、『この眼が視た情報を脳が勝手に分析かなんかして、起こりそうな未来をあたかも予知したかのように錯覚してるだけだと思っていた』つて言ったんやで。」

「零らしいね…」

「そうなのか。」

「翡翠さんに言ってなかったつけ？零つて、あんなすごい目を持つてたのにも、ものすごく現実主義だったんだよ。」

「それはそれは…」

「先程、貴方「も」お参りに来たのか、と言っていたが、君たちは、祠より、彼に会いに来たのか？」

「はい。…実は俺たち、ある時、すごく大きなケンカをしてしまって…それからずっと疎遠になってしまったんです。でも、仲直りできないうちに三年が経って…零が、死んでしまつて…」

「仲直りはできなかったのか…」

「…だからせめて、お墓参りだけでも、そう思つたんです。…意味はないのかもしれないが。」

「…死んだものが、生前何を望み、願つたか。それは、死者が死者である以上、生者にはわからない。死者と生者は、通常、世界を同じくすることはないからだ。…どう頑張つてもわからないことを、普通人は意味がないと判断する。」

「え？」

「…彼が何を望み、願つて、叶えられずに死んだとしても、生きている君たちにとつては、なんの意味もないことだと断じてしまうこともできる、というわけだ。たとえ君が彼に恨まれ、憎まれていたのだとしても、彼が死んだ以上はもう意味がないことだ。」

「…」

「まあ、そんな小難しいことを考えなくても、君はそれだけで十分じゃないのか。」

「どういうことですか？」

「生前、彼とケンカして、絶交していようが、故人を心から偲び、想えるのなら、その気持ちを持つて会いに行けばいい。…死んだものは、時が経てば、忘れ去られる。街の人に慕われていただろう彼も、誰からも忘れられないとは言いい切れない。」

「…」

「…だから、面倒なことは考えずに、その『会いたい』という気持ちだけで

会いに行けばいいんじゃないか。」

「…はい！俺、必ず零のお墓を見つけて、逢いに行きます！」

「で、その一歩として今日は祠の一つに來たわけだ。…これからどうしていくつもりなんだ、大地？」

「まずは祠をコンプリートするよ！」

「ええー！ 嫌や！ 第一、いくつ祠があると思つてんねん！」

「たしかに、碧衣の言う通りだ。文字通り、祠は街中にある。一つ一つ探するのは大変だぞ。」

「でも、祠のどれか一つが大本になつて、そこにお骨が納めてあるかもしれないでしょ？」

「それはそうやけど、それにしたつてめんどくさすぎるやろ。それに、空振りだったらどうすんねん！」

「そのときのために、同時進行でルイくんか、柳ヶ瀬さんを探すのはどうかなつて。」

「その二人が、手がかりを持っていそうなのか。」

「ルイくんと柳ヶ瀬さんは、零が仕事を始めたときに、一緒に始めた仲間だそうです。柳ヶ瀬さんは、もつと前から関わりがあつたみたいですけど。」

「なるほど。」

「特にルイくんは、街の人とよく交流してたそうなので、街の人に尋ねて回れば、連絡を取れるきっかけになるんじゃないかなつて。」

「そういうことなら、まだ負担は軽くなるだろうな。いいんじゃないか。」

「ヒスイまで…」

「…僕もできる限り協力するよ。」

「えっ、いいんですか？」

「…墓があるのなら、一度ちゃんとお参りしておきたい。街の人が祠に多く

参拝しているということは、お墓に参っている人は少ないのかもしれない。生まれがこの街ではない、違う場所ならこの街にお墓がない可能性もあるし、生きている親族が多くなければ、訪れる人もあまりいないかもしれないだろう。そうだったら…寂しいんじゃないか。」

「…」

しばらく、その場に沈黙が落ちた。

よく考えてみれば、僕は彼が死んだ後にこの街に転入しているのだから、彼…零との関わりは（他者から見れば）ないわけだし、僕と大地くんたちは今日会ったばかり。

「嫌だったら、断ってくれてかまわないが…」

少し気まづくなりつつ、声を掛けるが、

「いえっ！ ぜひともお願ひします!!」

僕の言葉を遮って、叫ぶように大地くんが言った。

「…それじゃあ、よろしく。」

僕は彼に左手を出しかけて、右手を出し直した。

「つてか、喉乾いたわ。なんか飲みもん買ってくる。」

「では、俺も行こう。大地はここで待っていなさい。」

「うん。行ってらっしゃい。」

歩いていく二人の背を見送っていた彼が、二人を見つめたまま、言った。

「…ありがとうございます。」

「何が？」

唐突なお礼の言葉に、問うと。

「さっき、お墓に参っている人が少ないなら、零は寂しいんじゃないかって、言ってくれたださったので。」

「…別に、礼を言われることじゃないよ。」

「それでも、ありがとうございます。」

「…」

それからは、楽しかったが、けっこう大変だった。

大地くんたち三人と、僕の住んでいる街は違った。

僕は零の暮らしていた（今もそうではあるが）街に住んでいたが、彼らは仕事の都合上、二つも三つも離れた街に住んでいたのだ。

彼らは休日を使い、週に二回程、この街にやって来る。

そして地図を片手に街をひたすら歩き回り、印を付けつつ、この祠はもう訪ねた、ここはまだ、としらみつぶしに探して行った。

同時に、祠で出会う人々に「柳ヶ瀬さん」と「ルイくん」の所在を尋ねて回った。

そしてある日。

「今日は、この先にある祠に行きます。近くに小さな森みたいなところがあるらしいので、少し涼めるかもしれません…」

言葉が途切れた。

「大地？」

霧くんの問い掛けにも、反応を返さず、どこか離れたところを見つめている。

「あの茶髪は…」

「大地？」

「ルイくんかもしれない。行ってみる！」

そう言うが早いかな、大地くんは走り出していた。

「大地！ 待てや！」

追って僕たちも走り出す。

「間違いない。あれは！」

「ルイくん！」

「あんたはたしか、鷹城……」

「鷹城大地。よろしくね。」

「おう……」

「……んで、何か用なんだろう？」

場所を変えて、近くにあった広場。

ルイくんがよくパルクールというものをやっている場所のようで、なかなかよくわからないものがか置いてある。

「……零のお墓の場所、知らないかな。お墓参りがしたいんだけど……」

大地は、若干言いにくそうに彼に伝えた。

彼は、大地の言葉にはつと顔を青さめさせると、狼狽えたように視線を彷徨させた。

そして、絞り出すように答えた。

「……わりい。わかんねえんだ。」

申し訳なさにそう言った彼に、大地たちは三者三様の反応を返した。

「えっ!？」

「はあー!? なんでやねん！」

「おや……」

僕も驚きのあまり、目を見開いたまま固まってしまった。

翡翠さんが尋ねる。

「わからない、と言ったが、何故わからないんだ？」

「あいつは……突然、いなくなつただろ？」

その言葉に、大地が「そうだったね。」と答える。

「そうなのか？」

僕が尋ねると、「そういや、アンタは彼奴が死んでからこの街に来たんやつたな。ルイの言う通りやで。」と霧くんが答えてくれた。

「アイツは、ある日突然いなくなつたんや。そして、小さくなつて骨壺に収まつて帰つて来た。」

彼の後を継ぐように、大地くんも続ける。

「還つて来たそのまま、何処かに行つてしまつて……お葬式こそ行われて、最期の別れができたけど、その後の零の行き先を知っている人がいないんです。」

「『行き先を知っている人がいない』とは？」

「零は一人っ子で兄弟もいないし、12歳の時に両親を亡くしているらしいんです。……らしいっていうのは、俺も零の葬式に出るまで知らなかつたからなんですけど……それで、親類も祖母にあたる人しかいないそうで……」

「そして誰も、連絡を取れる人がおらんや。葬式も、喪主をヤナガセさんがやつつて、おばあさんも来んかつたんやつて。」

「そうだったのか……」

「たしかに、よく考えてみれば。おばあさんがいるという話は大地から聞いていたし、柳ヶ瀬さんも古い知り合いと聞いていた。しかし、彼の血縁らしき人は見当たらなかつたし、喪主も柳ヶ瀬さんだった。当時に気づいていてもおかしくはないだろうが……」

「最初から最後までずつといたわけじゃないんやし、ヒスイはホズミのことうよく知つてるわけでもない。しかたないやろ。」

「それもそうなのだがな。」

すっかり日は暮れ、夕暮れの光が顔を照らしていた。

「話し込んでしまったな。…そろそろ帰らなければ。」

「本当だ…」

結局は零の墓の場所が分からず、残念そうな大地に、ルイは言った。

「…柳ヶ瀬のおっさんなら、鼎さんと連絡が取れると思う。頼んでみるよ。」

「ありがとう。」

「…別に。」

ルイくんが柳ヶ瀬さんを通して、零の祖母であるという「鼎さん」に連絡を取ってくれた。

鼎さんは零の遺骨を受け取った後、彼を両親と共に眠らせたという。

僕たちは鼎さんに彼の眠る場所を訊き、心づくしのものを持って向かった。

「…久しぶり、零。」

「…」

応えるものはない。

「ほんととはもつと早く来たかったんだけど…ごめんね、遅くなって。」

「そんなことはない。」

「…どうしても、謝りたくて。もう零はいないって、死んだんだって、わかっている。でも…自己満足かもしれないけど、謝りたかったから。」

「謝らなければならぬのは、俺の方だ。俺の方こそ…」

「俺、あれからずっと考えてて…零に酷いこと言っただなって、思っって。」

「俺だっって、お前の気持ちも考えずに、酷いことをした。…俺の方こそ、悪

かった。」

「…ごめんね、零。」

大地は、アルマンデザインガーネットの瞳から静かに涙を流した。

「会いに行けばよかった。零が、お前が生きているうちに…」

「…」

碧衣と翡翠は大地の傍らに立ち、黙って見守っていた。

朔は一步下がったところから、目を伏せつつ、大地の悼みを聴いていた。

やがて、大地が離れると、入れ替わるように碧衣が墓標の前に立った。

「相変わらず、気に食わん奴や。大地と勝手にケンカして、勝手に絶交して、あまつさえ勝手にいなくなりおつて。」

「…悪かった。」

「一発、殴らせろや。」

「碧衣…」

「碧衣。」

ヒュッ、と拳が空を切る音が響いた。

ガッ。

「痛つてえ…」

拳を抑えて、その場に座り込む。

「ほんとに…勝手な奴や。」

碧衣も、そのアパタイトの瞳から涙を流していた。

大地が供えた一本の白百合が、応えるように揺れていた。

元バーテンダーだという翡翠さんの、おすすめの酒で酒盛りをし、彼にたくさんのお話聞かせてから、その場は解散していった。

数日後、再び訪れた彼の墓前にて。

「これから、どうするんだ。ずっとこの生活を続けるのか？」

「いや、そのつもりはない。いくらこの街が事件だらけで、役割として守るものはたくさんあるとしても、すべてを守りきれぬわけでもないし、結局は『そいつの運がよかったかどうか』になっちまう。それに、今の俺が見えるものはほとんどいない。ルイや大地だってほんの一瞬、見えたかもしれない、目が合ったかもしれない、程度だ。事件の解決に携わり、この手で解決に導けるならともかく、ただ見ているだけ、というのも退屈なものだ。」

「手出しできないのが歯がゆい、ってことか。」

「歯がゆい、でいいのかはわからんが…自分の感覚では退屈、というのも大きい。本来、事件など起こらない方がよいのは確かだが。」

「見守るだけが退屈、というのはまあわかる。それに…」

「？　なんだ？」

「自分の好きなように過ごしてもいいんじゃないのか。これまでずっと、街を守ってきたんだろ。」

「…！」

彼は、驚いた顔をした。

「…なんだ。」

そう聞くと、彼は苦笑した。

「…いや、街を守る仕事を始めてからいままでに、そんなことを俺に言ったやつはいなかったから。」

(選択肢自体がなかったのか…)

「ありがとう。」

「…何が？」

いきなり言われて、反応が少し遅れた。

「自分が本当にやりたかったことが、少し思い出せた。お前のおかげだ。」

「…」

一切笑顔を見せることのなかった彼が、ほんのわずかだが、微笑んでいる。

「…別に、礼を言われることじゃないさ。」

一瞬言葉に詰まって、なんでもないように、ぶっきらぼうに、答えた。

「朔さん！」

「大地くん。今日も仕事か。」

「はい！仕事が終わったら、俺たちの事務所に来ませんか？碧衣が腕によりをかけて料理を作ってくれてるんです。」

「それは…君たちがよければ。ぜひいただこう。」

「ありがとうございます!!」

走り去っていく大地くんを見送り、ふと顔を上げると。

祠に腰掛ける彼と、目が合った。

神様は、今日もそこにいます。

返事のない星

神楽坂

毎年出していた手紙を今年はどこに出すべきか分からない。

ジリジリと太陽がヒトの露出した肌を焦がすような暑い季節に、進学先を考えるためにある大学のオープンキャンパスに来た。校舎の雰囲気を見て、公開授業に参加して帰ろうとしたときに「あの、これ落とししましたよ。」

と同級生ぐらいい見えるヒトが、リュックにつけていた小さきものを渡してくれた。その場から即座にはなれることになぜか気まずさを感じてしまい、世間話をしていたら共通の話題により初対面であるはずがかなり話し込んでしまった。そのヒトはヒナタというらしく、僕とは正反対のニンゲンで外交的で常に周りに人がいるような高校生だった。お互い天文学に興味があり、住んでいる場所は近くはないがこの話をできる人が周りにいなく、会いたいがため口実として年二回、夏と冬に天体観測を二人だけで行うようになった。その約束を手紙の中で決めていた。

吐いた息が白く変わり、寒さで手がかじかむ冬の夜。ホカホカのたこ焼きを片手に、広い丘に向かった。そこにはヒナタがベンチに座って待っていた。こんな寒中待たせてしまったと思うと少し申し訳なくなり、たこ焼きに気を配りつつヒナタのもとへ駆けていく。こっちに気が付いたヒナタは冗談交じりに「遅いよー、あともう少しで帰っちゃうところだったよ。」と云いながらも通りの笑顔を見せた。コンビニも近くにないような人気のない場所に声が消えてゆく。かなり着込んだが「避暑地」と夏はたたえられていた場所の冬は僕らの防寒着の間をうまく潜り抜けて、無防備な肌を刺激する。ブルーシートを広げ懐中電灯と荷物を無造作に置いた。高校生二人と大きな荷物を載せるには小さかったようで、リュックの端がはみ

出している。温かい緑茶とほうじ茶のペットボトルを僕に選ばせ、ヒナタは最近あった出来事、今日が楽しみすぎてあまり寝られなかったこと、夜行バスは案外問題なく快適に過ごせたこと。話し出すと止まらなくなり、話題を探すことに苦労しなくて助かった。時々僕の返答に「うははっ」と落ち着いた雰囲気容姿に合わないような吐息交じりの甲高い声で子供のような笑顔を見せた。

今年の夏は都合が合わないようだ。帰ってきた手紙には、丸っこくて癖のある字で書かれた「夏休みは部活と帰省で予定を開けられない」という断りの言葉があった。少しの不満もあったが学年が上がることに忙しさが増していくことは当然のことだと思い、その時は「仕方がない」と自分に言い聞かせていた。

一人で行う天体観測はいつもよりも味気なく、気を紛らわせるために買ったチョコミントのアイスは冷たすぎた。できるだけ湿度のない方へ向かったが、そこまでの資金もなく満足するほど星は見えなかった。一時間も経っていないが、ノイローゼになるほどのセミの鳴き声と耳元の蚊の音を横に観測するのめんどくさいたまたまなくなったため、これと言って何かした訳ではないが早めに切り上げることにした。冬にはきつと予定を合わせて以前の天体観測ができるはず、そんなことを根拠もなく確信していた。いや、したかった。

そんな期待はあっけなく裏切られ、冬も一人で天体観測を行わなければならなくなった。明かりの灯らない夜の街で僕は独り。ヒナタと出会う前はただ天体観測するのが楽しく独りでも何も思わなかったはずなのに、いまではヒナタがいないと寂しさを覚えるようになってしまった。凍るよう

な寒さと湿度の低い冬の夜空をしづんぎ座流星群が埋めてゆく。瞬く星が寂しさを加速させる。僕はふと「ヒナタもこの同じ空を見ているのだろうか。」と思ってしまった。

月日が経ち、公園に咲いた花の匂いが鼻の奥を刺激し、マスクをよく見るようになった頃、少しの希望をもって送った手紙の返事はすっかり返ってこなくなった。僕は返ってこなくなった理由を聞く勇気が出ず何も手につかないまま途方に暮れていた。知り合ってから長くない、言葉で伝えないと伝わらないことが大半を占めている僕たちは互いに何を考えているのかわからなかった。住所が変わってしまったのだろうか、何か返せない事情があるのではないか。考えてもキリがないことが頭の中でぐるぐるすると駆け巡る。分らないながらに根拠も何もなかったが、ひとつだけ、きつとヒナタから返事が返ってくることはないのだろうと、思いたくはないが確信を持てた。

大学生になり、僕は機械工学を学んでいる。好きだった天文学はあの時から楽しめなくなってしまい、したいことが見つからなかった僕に当時の担任に天文学で身についたものが活かせるという学問を紹介してもらった。興味はなかったが、次第に工学の楽しさがわかるようになり、同じ学部の間と交流を深め、大変ではあるがそれなりに幸せと感じる充実した日々を過ごしている。

日が落ち始めすっかり夕方になったころ、日の当たらない少し肌寒い車が通れないような狭い道を通り大学近くにあるアパートに帰り、郵便物を確認した。いつものDMやチラシの中に、覚えがない差出人の名前が丁寧

に書かれた手紙が入っていた。

手紙に書かれた場所には、土砂降りの雨の中、パイプオルガンの音色とむせび泣く音が響く白い教会があった。参列するヒトの多さがヒナタの人柄を物語っている。牧師が淡々と聖書を朗読し、黒を身にまとったヒトたちが白のカーネーションをヒナタに捧げた。僕も捧げに行くと、たくさんの花に囲まれたヒナタは微笑んで待っていた。僕がヒナタの顔を見たのはこれで最期だ。

雨が上がり、アスファルトの独特のにおいがあたり一面を覆う。静かな中、したたる滴と足音だけが残る。少し歩いたところでそよ風とともにラベンダーの香りが運ばれてきた。後ろを振り向くと小柄な一人の女性に声をかけられた。「これ、落としましたよ。」

身代わり姫と傀儡王

阿野 二柝

ここまで、長いようであつという間だった。

「——誓いますか」

「誓います」

これで終わる。やっと。

「では、指輪の交換を」

ヴェールが持ち上がる。まだ気づかれてはいないはず。

「待て」

目の前の男が、冷たく突き刺さるような声色で呟いた。

「撤回する。私は誓えぬ。結婚式は中止だ！」

ヴェルナー市、ギユステイナー教会、黄昏時。気づかれてしまった。私を待ち受ける未来は二つに一つ。国に送り返されるか、この地で断頭台の露と消えるか、だ。王を謀った罪は、私一人の命では償えないかもしれない。今すぐ失神できない己の神経の太さを呪った。

一、 身代わり姫の決心

結婚式の一週間前、私はいつもと同じように主人——エリーシア・シャンドル公爵令嬢の髪を梳いていた。午後にはこの屋敷を発つ。彼女は隣国ヴィツェルのルドルフ国王陛下に嫁ぐのだ。

歳は彼女と同じ十八。十五年前の革命から立ち直れずにいる国を導くため、唯一の正当な王族の生き残りとしてされている彼が即位するにあたり、この縁談がまとめられた。

我が国シエールージュの直系王族には年齢の釣り合う独身の姫がおらず、

三代前の王弟の血を引く彼女に白羽の矢が立ったのだ。エリーシアも筆頭公爵家の長女なので王位継承権は持つており、しかも父公爵がルドルフ即位の立役者の一人でもあったから、完璧な釣り合いの取れた婚約と云えた。

この若き王は長い間乳母の家で匿われながら来るべき時に備えていたとかで、ようやく大半の国民の支持とかつての重臣たちの後押しを得ることができ、その父の血を吸った王冠を戴くこととなった。ただし、あくまで政治を司るのは議会と大臣たちだ。混乱する一方の国を実際に統治することは期待されておらず、国民にわかりやすい敬愛と批判の対象を据えることで議会から厳しい目を逸らすだけ——そんな役回りから、陰では「傀儡王」と呼ばれている。陰では、と云ったが、隣国にも届いている話なのだから、公然の秘密どころではない。

ヴィツェル革命の頃、私は五歳だった。ある程度物心のついた年齢なのにもかかわらず、当事国でないシエールージュにいたせいか当時の記憶はほとんどない。私でさえこうだというのに、あのとときの彼はまだ三歳の幼子だ。自分が王族の生き残りだと知ったときの衝撃は相当だったのではなからうか。

閑話休題、私の敬愛する年下の主人はこの結婚から逃れようと躍起になっている。父公爵の野心家気質をしつかり受け継いだ彼女は、「傀儡王の妃なんて嫌、嫁ぐなら国母として権力を握れるところがいい」と云って聞かない。——これだけではとんでもない暴君の卵のようだが、実際エリーシアはちゃんと民のことを考えている人だ。だからこそお飾りの妃になって自分の意見を聞いてもらえないのが我慢ならないのだという。

この我儘には公爵夫妻も私も頭を抱えてしまった。公爵家にはもう一人の娘ルチルもいるが、彼女は男装して剣術を習ったり遠乗りに出かけたりするのが大好きな娘だ、とても王妃など務まらない——というのが二人の

両親の見解だった。

「そうだわ、アンヌに代わりに嫁いでもらうことはできませんの？」

どうやってこのお嬢さまを午後までに説得しようかと考えながら髪を結び始めていた私は、危うく櫛を取り落とすところだった。エリーシアは鏡台の前で私を屈ませると、鏡越しに目を合わせ、「ほら、目元などは似ていないこともなくつてよ。その綺麗な銀髪を金に染めれば判らないわ。どうせ向こうに渡っているのは肖像画だけで、わたくしの本当の顔なんて知らないんだから」

「ですがそれは……それは国全体をペテンにかける大罪です。私のような

一介の侍女には王妃たるに相応しい教養も品格もありませんし」

「あなたは普通の貴族令嬢よりよっぽど教養も品格もあると思うわよ」

「ですが——」

「だめ？ お姉さま」

「うっ……！！」

私はこの上目遣いに自分が情けなくなるほど弱い。二歳上だからと姉のように慕ってくれるエリーシアは、私に断らせたくない頼み事をするときには必ず私を「お姉さま」と呼んで瞳を潤ませてくるのだ。

「だ……且那様の許可が下りましたら」

まさか公爵が身代わりを認めるわけがなからうと思って返事を絞り出すと、

「やったあ！ ありがとうアンヌ、大好きよ」

——で、どうして今私はヴィッツェルの国章が入ったきらびやかな馬車に乗っているのだろう。

なんと公爵はしばし考え込む様子を見せたものの、入れ替わりの許可を出してしまっただの。

私は大慌てでエリーシアと着ているものを交換し、金髪のかつらを被り

——流石に染める時間はなかった——彼女の口調や仕草を叩き込もうと声を出さずにあれこれ呟きながら馬車に乗せられてしまった。出立の直前に、「式が終わったら陛下に渡すように」と公爵から封筒を預かった。封蠟はとつくに乾ききっていた。

ヴィッツェルとの国境で再び着替えさせられ、銀のかつらと侍女のドレスを纏まとったエリーシアと別れるまで、半ば夢の中にいるようだった。

もはや退けない。身代わりが発覚すれば一卷の終わりだ。私は覚悟を決めた。異国に骨を埋める覚悟と、「エリーシア・ド・シャンデル」——否、「エリーシア・フォン・ヴィッツェル」として生きていく覚悟を。

二、 傀儡王の憂鬱

明日には花嫁が到着する。望まぬ道を六日もかけて来るのだ、丁重にもとなさねば。

ルドルフ・フォン・ヴィッツェルは大きな溜息を堪たえ——否、堪えるまでもなく、彼は溜息のつき方を知らなかった——淡々と渡される書類に印を押していった。毎日が同じ事の繰り返しだ。「この印章を捨ておいて、拾った者が王になればよい。それで何が変わるといふのだ」と思ったことも一度や二度ではない。

十五年前の革命は幼き王子に心身ともに大きな傷を負わせた。国王夫妻だった両親はもちろんのこと、たった一人の姉に乳兄弟までもが、王宮を呑み込んだ炎の中で行方不明になり、おそらくは死んだ。乳母が自身の息子よ

りも先に自分を助け出し、家に匿い、焼け跡から見つかった幼児乳兄弟が革命軍——ほとんどが王位篡奪を目論んでいた宰相の私兵だ——によって王太子だと誤認されていなかったら、確実に今まで生き延びることはできなかった。今だって、父の側妃の父親だった宰相と彼の牛耳る議会からすれば、自分たちの圧政から民の非難の矛先を逸らすための国王だ。十五年前と何一つ変わっていないやしない。

もともと両親の仲は政略結婚ながらかなり良好だった。そこに宰相が自分の娘を側妃として押しつけた。宰相とは意見が衝突することが多く、側妃のひどい浪費癖で国庫が傾きかけていたため、自分が生まれたのをきつかけに父は側妃と離縁した。それでもしばらくは平和だったのだそう。少なくとも、表向きは。

事態が急変したのは自分が三歳になった頃で、側妃が湯水の如く使った金をどうにか取り戻そうと父王が四苦八苦していたときだった。国民からはすっかり「我々の生活を顧みずに贅沢ばかりする王家」と思われてしまっていた。これ幸いと宰相は王家への反感を煽り立て、掻き集めた私兵をもって革命を起こした。あれが謀反でなければなんだというのか。しかし国民が革命だと認識してしまえばそれまでのこと、史記では革命と呼ばれることになった。

家族を一気に喪つて以来、感情表現がうまくできなくなった。二歳までの自分は実質死んでいる。

いっどこでどうやって弱みを握られるか分らない。宰相が急に掌を返して即位に力添えをしてきたことも気持ち悪くて仕方がない。どうせまた避雷針にされて宰相の手の者に殺されるのだろうか。あるいはシエルージュの姫に寝首を掻かれるか。それならそれで、もうどうでもいいとすら思う。力

を持った敵が多く、生きる意味もあつてないような自分がまだ断頭台の世話になつていないのが不思議なくらいだ。

三．侍従長の独り言

傀儡王が傀儡王と呼ばれる所以は、実権を宰相派に奪われていることだけではない。陛下は感情の発露が一切できないのだ。あのとき王宮と共に喜怒哀楽を表す部分を焼かれてしまったのだ、と悪質な冗言ジョークを云う貴族もいるほどだ。

そんな王が妃を迎える。これは一年前の即位の条件にエリーシア姫との婚約が含まれていたことを知らされていなかった民衆にとっては、恰好のスキャンダルだった。花嫁にまつわるゴシップ記事読みたさに、貧民街の識字率が上がったという逸話まで生まれる始末だ。

さあ、馬車が到着する。奔放で気の強い姫だと聞いているが、人の噂ほど当てにならないものはない。どんな娘、あるいは刺客が出てくることやら。

四．結婚式前夜

私だけに乗せた馬車が王宮・グルーフト城の前で停まる。かつての王族の居城は革命の際に暴走した民衆が火をつけ、今は焼け残った部分も取り壊されて更地になつているそうだ。ここは十五年前までは離宮として使われていた。

「ようこそお越しくさしました、エリーシア姫」

侍従長——エリック・ルクサンと名乗った五十がらみのごま塩頭の男性だ——は懇懇なお辞儀をすると片手を差し出した。萎縮してはならない。私はエリーシアだ！ 凜とした姿勢を心がけながら馬車から下ろしてもらおうと、城の中へと案内される。

「こちらでお待ちください、陛下は間もなくいらつしやいます。どうぞ、おかつろぎください。ここは姫の家ですゆえ」

「ありがとう、ルクサン卿」

云つてしまつてから、はつと口を噤んだが、遅かつた。王族たるもの、使用人にいちいち感謝を伝えるような真似は――。

(まあ、使用人といつても侍従長は別格だし大丈夫でしょう)

自分で自分に云い訳をして、上品な金縁のティーカップを手取る。あたたい紅茶からふわりと漂う香り高い湯気が、少しばかり緊張をほぐしてくれた。

それにしても、前の城はほぼ全焼してしまつたというのに、離宮はこんな調度品も無事だつたのか。今なお国が大変な混乱のさなかにあることは忘れていないが、幾分か救われた気分になる。

――コンコン。

「はこ」

客室の扉が開かれる。護衛のひとりもつけずに、陛下が入ってきた。何かあれば私のすぐ側に控えるルクサンがどうにかできると思っているのだろうか。たかが小娘と思われているのだろう、事実だが。

「ヴィツツェルの太陽にご挨拶申し上げます」

私は立つて淑女の礼をとつた。シャンデル公爵家では、いずれ王家の一員となるエリーシアの付き添いとして恥をかかせないように、と私にも貴族と同じような教育を受けさせてくれた。まさかこんな形で役に立つとは思わなかつたが。

「遠路はるばるご苦勞であつた、シエルージュの姫。堅苦しい挨拶は結構」

「はこ」

「早速だが、姫。私は貴女と書類上の夫婦以上の関係を築くつもりはない。

身勝手な頼みだが、隙あらば娘を側妃に送り込みたがる貴族どもが鬱陶しいから、公の場ではそれなりに仲良く見えるように振る舞つてほしい。あとは好きにしてくれて構わない。愛人も自由に作つてくれ。それでは」

相槌を打つ間もなく、淡々と要件を述べて去つた陛下は、私の顔すらまともに見なかつた。

壁際に控える侍女たちとルクサンと私だけになつた客室には、重苦しい沈黙が降りた。

――陛下は綺麗な銀髪をしていた。革命の激しい心勞から白髪になつてしまつたのだと云われているが、どう見ても白ではなく銀だ。生まれつきの美しい色だ。顔は碌に見えなかつたが、よく通る低い声で、まさに君主たるに相応しかつた。

入れ替わりが露見しないようにしなければ、というだけでなく、「陛下の隣に堂々と立てるようになるう」という思いも湧き上がつてきた。

「姫」

ルクサンの少し柔らかくなつた声が静寂を破つた。

「この後はあちらの正餐室でご夕食ですゆえ、王妃の間でご準備ください」
「ええ、――」

ありがとう、はどうにか飲み込み、私は控えていた二人の侍女に誘導されて王妃の間へと移動した。

五. 悪夢

ああ、まただ。十歳を過ぎた頃から、何度も見ている悪夢だ。

四方から上がる火の手。黒煙の渦がじりじりと近づいてくる。熱い。熱い。熱い。

「逃げて、——！」

小さな女の子の声。耳をつんざくようだ。誰かに向かつて叫んでいるのは、どうやら自分らしい。誰の名前を呼んでいるのかは、いつも聞こえない。私の脚にしがみつくと子どもがいる。その子は向こうから走ってくる女の人の手によって私から引き剥がされ、どこかへ連れて行かれる。さらに迫る火の手。男の人のものらしい救いの腕が差し伸べられる……。

「っ、はっ、はっ！」

過呼吸の一步手前のような荒い息で目が覚めた。心臓がどこどこ暴れ回っている。額も、背中も、冬だというのに汗びっしょりだ。この夢を見るといつもこうで、そのうちこれが元で引いた風邪のために早死にしそうでと常々思っている。

王妃の間は公爵邸のエリーシアの部屋よりも落ち着いた内装で、そのせいか初めて来たはずなのに安心感がある。しかし一つ一つの調度品には大変質のよい素材が使われていることが見て取れた。ここに革命軍が踏み込んでいたら何もかも強奪されていただろう。グルーフト城だけでも無事でよかった。

暖炉に当たりながら暗い部屋の中を見回し、あらかた冷や汗が乾いてきたところで寝台に戻った。まだ三時間は眠れるだろう。明日一日、陛下の目をまかせれば、もう彼と顔を合わせることはほとんどなくなる。私はきつく目を瞑り、意識が飛んでいくのを待った。

六． 誓えぬ！

翌朝は日も昇りきらぬうちから上を下への大騒ぎだった。何人もの侍女たちが入れ替わり立ち替わりで私の支度を手伝い、当の本人は指示通りに立ったり座ったり寝転んだりするばかりの着せ替え人形のようになってい

た。そうして午後には首都ヴェルナーの郊外にあるギュステイナー教会へと出発した。ここはヴィッツェル王家の霊廟としての役割ももち、子どもの遺体はそのまま、大人は心臓だけが安置されているという。私の心臓もいつかここに置かれるのだろうか。壺には偽りの名を刻まれて。

神父のありがたいお説教も、今の私には良心の呵責を煽るものでしかなかった。——私が欺こうとしているのは陛下だけではない。ヴィッツェルとシエルージュの数百万の民、それに神をも裏切る行為だ。

「——誓いますか？」

「誓います」

陛下が答える。続いて私にも同じ質問がなされる。

「……誓います」

云ってしまった。

「では、指輪の交換を」

ヴェールが持ち上がる。寒さと緊張で全身が震え出しそうになる。まだ気づかれていないはず。

「待て」

低くて、冷たくて、それだけで人を殺せそうな声が、目の前の男から飛び出した。

「撤回する。私は誓えぬ。結婚式は中止だ！」

参列者が一斉に何事かとざわめく。失神する淑女もいる。終わった。気づかれてしまった。待つものは強制送還か、死……。

今すぐ失神しなかった。何ならその勢いで床に頭を打って死にたかった。私は陛下に手を引かれ、大股で早歩きの彼に会わせて半ば走るようにして聖堂から連れ出された。向かい合わせて馬車に乗せられ、グルーフト城へ

連れて行かれ、陛下の執務室に再び手を引かれながら入るまで、私たちはひと言も言葉を交わさなかった。触れれば切れるような張り詰めた空気の中、「もう殺すなら早く殺して」と、そればかり考えていた。

七． 記憶

執務室には、陛下とルクサンと私だけがいる。人払いがなされ、扉にしっかりと内鍵をかけると、陛下は私の右手を取って片膝を突いた。

「？」

みるみるうちに碧眼に涙が溢れ、病的なまでに白い頬を伝い落ちてゆく。思えば初めてまともに正面から顔を見たが、陛下は一切感情表現ができなかったのでは……。

「あ……あねうえ……！ よくぞ、よくぞご無事で……っ！」

二人の視線がぶつかると同時に、記憶の奔流が襲いかかってきた。

「っ！ ルディ！ ルディ！」

私はしゃがみ込み、急に小さく見えてきた背中に腕を回し、あとはもう二人で思う存分泣いた。

私の、たった一人のかわいい弟。どうして十五年も忘れていられたのか。悪夢でいつも引き離される幼子は、ルドルフその人だったのだ。

「エリーシア姫——いいえ、フリーデリケ殿下」

背後から届くルクサンの声も、すべて思い出した今となつては懐かしいものでしかない。彼はルドルフの乳母の夫で、私の教育係だった。そしてアンヌも仮初めの名だ。シャンドル公爵が私の身分を隠すために向こうでつけたのだろう。

「両陛下をお守りできず、申し訳ございませんでした」

「謝らないでください」

私は抱擁を解いて立ち上がり、侍従長のほうに向き直った。

「あれは時流の定めだったのでしよう。私こそ今まで思い出せなくてごめんなさい。それから、身代わりのことも」

「……宮殿の火事の際、ルドルフ殿下は妻が助け出すことができたのですが、フリーデリケ殿下のことは見失ってしまい、その後王子薨去の告知がなされました。私どもは、ご遺体がないのだからきつとお逃げになれたと信じ、祈っておりましたが、まさかシエルージュからエリーシア姫に扮してお帰りになるとは」

「姉上」

ルドルフに呼ばれて振り返ると、彼は睨ひまいたままだった。乾ききらない涙が一筋頬に残っているが、ほんのり赤くなつた目は微笑みの形を作っていた。

「本来、王になるべきは姉上でした。焼け落ちた宮殿から逃げ、ルクサンの家で自分が王太子になったと知らされたときは、子どもなりに辛くて堪らなかった。王位に就いて一年、姉上がいらっしゃれば、と思わなかった日はありません。お願いです姉上」

彼は王にあるまじきことに深々と頭を下げると、

「不甲斐ない弟で申し訳ありません。どうか女王として、ヴィッツェルを共に立て直してください」

「……私なんかに務まるとは思えないけれど、できる限りのことはすると約束するわ」

ことの顛末をどうにか便箋四枚にまとめて送ったシャンドル公爵家から、「アンヌ……いいえ、フリーデリケさまが本当のお義姉さまになるのよね。わたくしも全力で二人にお力添えいたしますわ」とエリーシア本人が飛ん

できたのは、これから二週間後のことだった。

なお、公爵から預かっていた封筒を開けると、内容は私がシャンデル家で保護されるに至ったいきさつで、「そういうわけでこの婚姻は成立し得ないから改めて話し合いをさせてほしい」と締めくくられていた。それは式の後でよかったのだろうか。公爵家がルドルフの後ろ盾という力関係でなければこんなことはできない。

大使としてヴィツェルに暮らしていた公爵は、革命が始まった直後まで帰国せずにおり、落城の晩に脱出したのだという。そのときに炎の中で逃げ惑う姉弟を発見し、ルドルフが乳母に抱えられて城の隠し通路へ連れて行かれるのを見届けるが早いかな、私を救い出してくれた。

焼死したはずの王女が生きていると公にすることはあまりに危険だったから、普通の貴族以上の教育を施しながら、長女の友人兼侍女として十五年間匿い続けた——と、こういう経緯であった。「ルドルフが即位してから数年後、情勢が落ち着いてから王姉を帰してヴィツェルに恩を売るつもりでもあった」と書き添えられていたが、そんなことはどうでもよかった。それくらいの打算がなければ優れた外交官にはなれまいし、どんな理由であれ、私を生かしてくれたことには心から感謝しているのだから。

とにかく今の私にできることは、本当の祖国と弟のため、そして育った国のため、一日も早くよき君主となることだ。弟の記憶とともにやつと思いついた本当の両親の顔を思い浮かべると、「お前ならできる」と云ってくれているような気がした。

*頁数の都合で、公爵が身代わり嫁入りを認めた経緯と、ヴィツェル王家のその後を割愛いたしました。これで完結としても差し支えないよう構成

しましたが、七月中旬の文芸部ブログで続きをご覧くださいませ
に尽きます。
*

愛しい悪夢の中で

あきつさ

夢を見ていた。悪意に満ちた笑い声が響く、長い長い廊下を、小さな身体で逃げ惑う夢。

笑い声が響く。走れ、走れ、走れ、捕まりたくないのなら。

「あ、ハハ、キヤハハハ、ははは、あ、あはは」

笑い声の主が、ぐにやぐにやして暗い色のナニカが追ってくる。現実の私よりもずっと幼い身体の今の私では、きつと簡単に追いつかれてしまう。

ひッ、ひッ、と呼吸が短く震えていく。きやらきやら笑う声が頭にキンキン響いて痛い。

視界が黒い色で一杯になって、立ち止まった。いくつもの影が私を取り囲んで見下ろしている。いびつな弧を描く目が、私を見ている。

いやな顔で笑う影と目が合う。

どちらを向いても、いやな形にゆがんだ目が見える。

声を上げて笑う影は、ただこちらを見ている。

ただ、私を見ている。

耳が痛くなるほどの笑い声。

その影の、リアルな歯が生え揃った口が、大きく開いた瞬間。私は走り出していった。

「アハハハはハハハ、キヤハハハハ、あはははははは！」

影は追いかけてこない。逃げ惑う私を笑う声が聞こえてくるだけ。

目の前に大きな扉が見えた。細長いドアノブに飛びついて、開けようとして――。

開かない。鍵がかかっている。ガチャガチャと音が鳴る。

背後から聞こえる笑い声が、いつそう高く響いた。

「あけて、あいて！ 開いてよ！」

ドアノブをガチャガチャと力任せに回しながら木製の扉をドン、ドン、と叩く。

ふ、とドアノブの手応えが消えた。扉が開いて、身体ごと扉の向こうの部屋に倒れ込む。

振り返って勢いよく扉を閉じると、ずっと聞こえていた笑い声がすうつと遠くなって、ようやく息をつけた気がした。

はあ、はあ、と荒い息を落ち着けるために脛丈のうすピンクのスカートを握りしめた。心臓はどくどくと音を立てていて、手だつて震えているのに、なぜだか涙は流れない。

こんなに怖いのに。こんなに辛いのに。

オレンジ色の服の胸元を強く握る。心臓が痛い。

「アハハハ、ハハハ、」

「アハハハハハハ、あ、はは」

「はは、アハハあは。きやはは、ハハ」

「きやはは、アハハハ。はは。アハハハハ」

キンキンする甲高い声が、扉越しにすぐ近くから聞こえた。何人も何人も、笑いながら扉の向こうを通り過ぎては戻って来る。

目を閉じると、私は小さな子供たちに囲まれていて、笑われている。

『へんなの』『きもちわるい』『ばかみたい』

次々と顔の見えない小さな子供が私を取り囲んで言葉を浴びせる。指を指される。髪をつかまれた。痛くて、怖くて、やめて、と泣いたのに、みんなみんな笑ってる。

目を開くと、目を閉じる前と変わらない廊下が見えた。私の周りには誰も

いない。思い出したのは、多分幼稚園の頃のことだったと思う。

少しでも笑い声から離れたくて、そつと立ち上がると、足音を立てないように歩き始めた。

足元の床は白っぽい正方形のタイルが敷き詰められていて、壁は白いコンクリートでできた長い廊下だ。背後の扉は重たい木製。知っている場所のようにも、知らない場所のようにも思えた。

廊下は、奥に進むにつれて暗くなっていて奥が見えない。この先に何があるのかなんてわからないが、この扉の向こうに戻るよりはずっとマシに思えた。

じりじりと足音を立てないように進む。進めば進むほど世界が暗くなっていて、とうとう自分の足元も見えなくなってしまった。両手を前に伸ばして手探りで歩く。

「あれ」

指先がなにかに触れたような気がした。柔らかくて、同じくらいの体温を持つなにか。顔を上げる。

「あ、」
思わず、声が落ちた。私が、暗闇だと思っていたのは、大きな影の集合体で。

目が合う。数多の目が、口が、顔がこちらをみている。影におおわれる。呑み込まれる。

息が苦しくなって。

「アハハハハハハ！！ きやははッ、ハハハハハハハハ！！」

「うあ、は、はあ、はあ」

まぶたをこじ開けて最初に見えた景色は、うっすら朝陽をはらんで明る

くなったカーテンだった。

「は、はあ、」

呼吸が落ち着かない。心臓も早鐘を打っている。身体にかかった毛布を払い除けて上半身を起こす。見慣れた自分の部屋だった。

「さいあく」

まだ朝早いのか、カーテン越しの光は弱々しい。寝巻にしている「シャツが汗で背中にじっとり張り付いてうすら寒い。ついさっきまで見ていた夢の余韻で手足から力が抜けている。

思い出すのは、夢の中、暗闇の中に飲まれるまでにいた、あの廊下。通っていた幼稚園の床に、小学校の壁。極めつけは実家の玄関扉だ。過去の記憶をカラージュして作ったような、いびつな空間。

「ほんとに悪趣味」

夢見が悪かろうと朝がやってきたら仕事に行かなければならない。普段通りに身支度を整える。動きやすい仕事着に着替えて、背中まであるまつすくな黒い髪を一つにまとめる。

いつの間にか慣れてしまった化粧で顔に血色の良さを足して、クマを隠す。洗面台の鏡に映る私と目が合った。まだ少し早いが、仕事に向かって家を出た。

焼けたパンの香ばしい匂いが店中に広がる、私の仕事場である駅前の小さなパン屋。

夕方の賑わいも一通り終わって、店内にいる最後のお客さんがガラスドアから大通りへと出ていった。大通りに面した一面の壁はすべてガラスだから日が沈んで物寂しい色になった街並みがよく見える。

そろそろ片づけをしようとしてレジの横にあるショーウィンドウ兼カウンタ

―を小さな布巾で拭き始めたとき、カランカランとドアベルが軽やかに響いた。

「いらつしやいませ」

入ってきたのは若い男性と小さな女の子の親子だ。ふたりとも笑顔で、なにやら楽しそうに話している。カウンターを拭く手を止めて、レジの前に戻る。

「え！ あまいパンも買つていいの！？」

「二つまでな」

「やったー！！」

女の子は父親の言葉にすっかりテンションが上がってしまったって、きゃらきゃらと歓声を上げた。

「花笑、レジ代わるよ。先に裏片付けてて」

短い髪おしゃれに編み込んだ同僚のあゆが、そっと私の右手を引いて立ち位置を入れ替える。ペンだこのある馴染みのある手に包まれる。いつもニコニコと笑顔を浮かべているあゆは、無愛想な私の数少ない友人だ。

あゆに手を引かれて初めて、手のひらに爪が食い込むほど強く握っていることに気がついた。

「……ありがとう」

厨房に戻り、しばらく黙々と片づけをする。先に店長とあゆが作業を始めていたようで、あと少しで終わりそうだ。

「店長、もう表は締めちゃいました。こっちは手伝いますね」

あゆがドアを後ろ手に閉めながら厨房に入ってきて、店長に声をかけながらモップで床を拭き始める。

「花笑、顔色が良くないよ。ちゃんと休めてる？」

「……大丈夫。あんまりよく眠れなかったただけだから」

「明日はお店も休みなんだし、ゆっくり休みなよ。私にできることなら手伝うしさ」

「うん……ありがとう」

店の外で、ばいばい、と手を振るあゆに手を振り返して家路についた。うす暗い道を、ひとりで歩いて帰る。徒歩で通うには少し遠いが、歩けないほどの距離でもない。なにより、何もせずにただぼんやりと歩いているこの時間が好きだった。

昔からずっと騒がしい場所とか、人混みとか、そういう場所が苦手だった。

自宅の小さなマンションに到着したときには、もう暗いのに、まだ蟬の音が聞こえた。カチャリと音を立てて玄関の鍵を回す。

悪夢は、ずっと前から私の日常だった。

玄関で靴を脱いで、洗面所に向かう。手を洗って、目の前の鏡を見た。

「確かに、これはなあ」

汗で化粧が崩れてしまい、ただでさえ悪い顔色がさらに不健康に見える。とくに目の下のクマがひどい。

「早く寝ないとんだけどなあ……」

眠ることが怖くなったのは、いつからだったのだろうか。

そっと目の下に指先で触れる。休養を求める脳みそが、ズキズキと痛んでいる。

気がつくくと、暗闇の中でひとり、ぽつんと立っていた。見下ろすと今の私よりも幼い身体。すぐにいつもの悪夢と気づく。

周りを見渡すと、長い廊下にいた。たくさん連なった窓から、さんさんと

太陽光が入り込んでいます。

突然甲高い笑い声が響き渡った。反射的に振り返る。

ぱちり、と目が合う。

ニンマリと歪んだ、その両目と。

「アハハハハハハ、ははははははあははは」

笑い声をあげる影が、ゆっくり、ゆっくり、こちらに近づいてくる。笑い声が、ゆっくり、ゆっくり、大きくなっていく。

「あ、はははははは、きやはははははは、ははあは、あははは！！」

たまたらずその場から走り出した。笑い声しか聞こえない廊下に私の足音が響く。

走っても走っても一向に景色が変わらない。水の中でもがいているような、手応えのなさ。ゆっくり近づいてくる笑い声は、次第に数を増やしているような気がした。

「はは、あは、ははは、あはははは」

すぐに息が上がってくる。ひゅう、となる呼吸が苦しい。どこかの部屋にでも逃げ込めればと思うのに、長く続く廊下は一向に終わりがなく、教室のドアも見当たらない。

ただ壁と窓に挟まれた、学校の廊下のように、どこでもない空間が続いているだけ。

「はあッ、はッ、ひゅ、」

息が苦しい。笑い声が聞こえる。やめて。笑わないで。

足がもつれる。動かない。走っているのに。

「あはは、はははははは あははははは、ははは」

笑い声が、すぐ後ろに、それで、息が苦しくて、視界が暗くなつて。

「こつちだ！」

急に聞こえた少年のような声とともに腕がつかまれて、そのまま消毒液の匂いのある部屋に引き込まれた。学校の保健室のように見える。

「静かに。……あの影は音がしなければ気が付かないよ」

背中側から抱え込まれて、後ろから小さく囁かれた。ドアの隙間から外を覗くと、モヤモヤとした影がじりじりとドアの前を通り過ぎていくのが見えた。

それでも身体の震えは止まらないし、急に止まったせいかわ、呼吸はどんどん苦しくなる。

「ひゅ、ヒュ、ひッ、ひう」

息を吸っているのに、苦しい。内臓が痙攣しているような感覚がする。

「花笑、落ち着いて。大丈夫、ゆっくり息を吐いて、吸って、吐いて……」

私のお腹に回された腕にぐっと力がこもった。崩れ落ちそうな私を支えてくれる腕に両手で縋り付く。背中越しに感じる体温が暖かい。少年の声に合わせて息を吸って、吐いてを繰り返した。少しずつ息が整っていく。

「落ち着いた？ 大丈夫？」

背後からの声に、小さく何度も頷いて、そつと身体を離れた。

「……ありがとう、ございました」

「ん。どういたしました。……ここは君の夢の世界？」

少年は目が隠れるくらいの長い前髪の間から私を見下ろす。私も頭二つ分くらい背の高い少年を見上げた。少年の着ている少しオーバーサイズ気味の、どこかの学校のジャージは、なんとなくどこかで見たことがあるような気がした。

「うん」

「ふーん、やつぱりおれの夢の中じゃなかったのか。……ねえ、目が覚めるまで一緒に居てもいい？」

私も同じように周囲を見渡した。相変わらず笑い声が聞こえるが、襲ってくるような存在は見当たらない。廊下がいつまでも続いているのかと思っただけれど、遠くに見慣れない扉が見えた。

歩夢は、よかった、行こうか、と言うと、そのまま歩き始めた。

「まだ手つなぐ？」

「あれ、あ、ごめん！ 嫌だった？」

「別に、嫌じゃないよ」

「……じゃあつないだまにしても良い？ はぐれたら困るしさ」

「うん」

歩夢の音が、迷子の子供みたいに聞こえた。それに、なんだか繋いだ手が震えている気がしたから、繋いだ手にぎゅつと力を込めた。

「ね、ここはいつもこんなに賑やかなの？」

突然歩夢がそんなことを言った。『賑やか』と評するには、この夢はかなり悪趣味すぎる気がするけれど。今だって、姿はないのにずっとどこからか笑い声が聞こえてきている。クスクス、くすくす、と。

「にぎやか？ ここは騒がしいだけ」

だからつい棘のある言葉をあふれさせてしまった。

「花笑は、この場所が嫌い？」

「……こんな不気味な場所、」

「……嫌いああ、ごめんね。少し、羨ましかったただけなんだ。おれの夢は……おれだけ世界から消えちゃったみたいで」

私が吐き捨てた言葉にも傷ついた様子もなく、歩夢は打ち明け話をするように自身の夢の世界について語る。心のやわい部分をさらけ出すようなそんな言葉に、なんと答えたらいいのかわからなくなってしまった。こちらを見ていないようで、私を見ていない歩夢の目から視線をそらす。

歩夢は笑顔を浮かべているのに、ちっとも楽しそうじゃなかった。

「なんで楽しくないのに笑ってるの」

「………なんでかなあ」

「わかんないの？」

「………、わかりたくないのかも、っ」

言っている意味がよくわからなくて、質問を重ねようとしたとき、急に歩夢が走り出した。

身長差から、歩夢の速度に対応できずつんのめる。突然の行動の理由がわからなくて、引つ張られて走っている体勢からちらりと後ろを振り返った。

もやもやした影が一步ごとに輪郭を獲得して、人間のカタチに近づきながら私たちに迫ってくる。距離があるのに、その影に頭がないのが見えた。笑う声が聞こえなかったせいで接近に気付けなかった。

廊下の先の扉まではまだ距離がある。だが、背後で追ってくるナニカの方が速い。もやもやというか、どろどろというか、そんな様子だった影は、もうすでに人間のカタチと言えるほどになって、笑っていた。

目が離せない。怖いのに、嫌なのに。カタチを変えていく影から、見えるはずのない笑顔から、目を離せない。

「花笑！ 前だけ向いて！」

歩夢の声に、ハッと意識が戻る。前を見ると、もう扉まであと少しだ。

歩夢が手を伸ばす。プラスチックの丸いドアノブに触れた。扉が開いて、歩夢に強く腕を引っ張られる。その勢いで扉をくぐって、繋いでいた手が離れた。右手の中にあつた体温が逃げていく。

「歩夢？」

振り返ろうとしたら、バタン、と音が鳴った。扉が閉じている。それなのに歩夢の姿は見当たらなくて。

「ごめんね」

扉のすぐ向こうから歩夢の声がした。影の笑い声もすぐ近くから聞こえる。

「なんで、」

扉を開けようとしてドアノブを掴んだ。ガチャリガチャリと金属の音が鳴るだけでドアノブは回らない。

「一緒に逃げようよ、ねえ」

「アハハ、あは、キャハハ、はは、」

「……ごめん、おれの夢の中に、花笑が怖がるものはないはずだから」

「あははは、アハ、きやはは」

笑い声にかき消されそうな歩夢の声を必死に聞く。

「開けてよ、危ないって知ってるのに、なんで、ねえ、開けて！」

扉を叩く手に次第に力がこもっていく。ダンツ、ダンツ、と音がなつて、

握りこぶしがジンジンと痛んだ。

声が震える。笑い声が響いて歩夢の声が聞こえない。

「開けて、一人にしないで、一緒に逃げようよ………、ねえ……」

言葉にも拳にも込めた力がどんどん抜けていく。声が震える。扉にもたれてへたり込んだ。嘲笑うような声がたくさん、たくさん響いている。

「おれがここにいれば、影たちはそつちに行かないから、だから、大丈夫、心配しないで」

嘘つき、歩夢も声が震えてるのに。言い返してやりたいのに、言葉にならない。

「私にできることなら手伝うって、言ったでしょ」

最後に聞こえた歩夢の声は、言葉は、どちらも聞き覚えがあつて。

私が顔を上げた瞬間、すべての音が聞こえなくなった。扉の向こうの歩夢

の存在も分らない。

目頭が熱くなる。頬が濡れた。しばらくして自分が泣いていることに気がついた。

しばらくそうしていたが、やがてふらふらと立ち上がる。ドアノブを握るが、相変わらず回らなかった。

手の甲で涙をぬぐって、扉に背を向けた。大丈夫、ひとりでも歩ける。

振り向いた先は、知らない家の中だ。私がいる場所は玄関で、目の前には

二階に続く階段がある。右側にはリビングがあつて、スーツを着た男やエプロンを付けた女、セーラー服を着た少女がひとつのテーブルを囲んで楽しそうに食事をしている。だが全員に頭がない。

「それでね、今日学校でね……」

「わあ！ すごいじゃない！……」

「ねえ」

スーツを着ている人に話しかけてみても両手で腕を掴んで食事を妨害してみても反応なし。

「へんなの」

頭のない家族の団欒は、私がいなくても続いていく。

彼らにも背を向けてリビングを去ろうとしたとき、スーツ姿の男の、低い声が出た。

「本当にお前は可愛いな。あゆとは大違いだ」

父親らしき人が少女に話しかける。

私の夢の中でも聞いたその声をやたらとはつきりと聞こえた。

リビングを出て階段を上る。二階には大人用の寝室と二つの子供部屋があつた。「歩夢」とオレンジ色のネームプレートのかかった扉を開ける。

ピンクやフリルの可愛らしい調度品と、ボーイッシュな小物がちぐはぐな印象を与える部屋だ。勉強机の上に置きっぱなしのペンケースから、一本のペンを手に取った。

近くにあったノートを開いて、ペンを滑らせる。うろ覚えで、すっかり調べたこともないけれど、もともと妖怪なのだ。正解なんてないのだろう。ノートの紙面から立ち現れた小さな獾ばくを見て、私は小さくうなずいた。

「全部ぜんぶ、この世界を、なかったことにして」

自然とまぶたが持ち上がる。太陽はすでに高く昇っていて、カーテン越しでも明るい。

寝すぎたせいで身体は重だるくて熱っぽくて、目だって腫れているけれど、心だけは軽い。

起き上がってスマホを手にとると、少し手間取りながら目的の電話番号をタップする。数回コール音が続いたあと。

「あ、もしもし？ ごめんね。まだ寝てたかな？」

『ううん、大丈夫。……でも珍しいね。花笑が電話してくるなんて』

電話越しのあゆの、眠たげに低くかすれた声は、やっぱり聞き覚えがあった。そういえば、あゆに電話するのは初めてだった。

「うん。変な夢を見てさ。話したかったの」

『……悪い夢だった？』

「ううん、そんなことなかったよ、歩夢あゆむ」

「悪夢だとしても、あなたに会えたから。」

思い出のお城

銀平糖

ミンミンミンミンミン ミンミンミンミンミン ジー

外では蟬が鳴いていて、その声は部屋の中にも聞こえる。

「き江さん、私はね、あの城に行きたいんだよ」

正が言った。

「はあ、あの城ですか」

き江の頭に『？』が浮かぶ。

「そう、あの城だよ」

「どの城でございますか？ 大阪城ですか、名古屋城ですか？」

き江は知っている城の名前を挙げてみる。

「違うよ、き江さん。ほら、あの城だよ。白色の」

『白い城』といわれたら、き江に思い浮かぶのは一つだった。

「ああ、姫路城ですか。兵庫はちと遠いですねえ」

き江達が暮らしているのは、東北地方。兵庫に行くには、飛行機を使わない

とキツイ。

「いやあ、違う」

「ええつ、そうですか。ほかに白い城っていったら……ううん、思いつきま

せんねえ」

確信して言った姫路城が違うといわれて、もう、き江にはアイデアが浮か

ばない。

「とりあえず、お茶でも飲みながら話しましょうよ、正さん」

「おうおう、そうですね。き江さん、そうしましょう。き江さん、今日はあ

のお茶がいいと思いますよ」

「はいはい、正さん。かぶせ茶ですね」

よつこらしよ、と正はソファから立ち上がり、お湯を沸かす。き江は、言われた茶葉を引き出しから取り出す。

「あと、あれがあつたけど、お茶のお供にあれを出したらいいじゃないか」

「ああ、あれですね」

そのお菓子は仏壇に上がっていたので、き江は隣の仏間に向かい、おりんをチンと鳴らして、木のカゴに入ったお菓子を二袋取る。

「仏様、いただきますね」

き江はお菓子を皿に載せて、正がいる机の上に置く。

「はい、先週、美央ちゃん達からもらったアメリカのお菓子ですよ」

「ありがとう」

袋を開けると、鮮やかなピンクのチョコレートにコーティングされたお菓子が入っていた。

ザクザク

そのお菓子は、チョコレートでコーティングされたビスケットサンドで、さらにそのビスケットの間にクリームが挟まっていた。甘党のき江でも、やはり、外国のお菓子は少し甘すぎると感じた。

「結構甘いですねえ」

「そうかい、私はこれが好きだよ」

正が言った。

「正さんはこういう外国のお菓子、好きですよね」

正は外国の甘いお菓子が大好きで、スーパードで外国フェアなんかをやっていると、いつのまにかカゴには外国のお菓子が入っている。

「私はアメリカに居たからね。半分アメリカンなものだ」

正はよく、自分は『アメリカン』だ、と言う。

「はいはい、アメリカンですね。それで、正さんのいう白いお城とはいったいなんなのでしょうかねえ」

いつものことなので、き江は正の『アメリカン』の話はサラッとながして、本題に戻す。

「私もね、はつきりと名前まで覚えてるわけではないんだよ。ただね、若いころに一度訪れて、それはそれは美しかったんだ。一目見れば、きっとわかるんだけどな」

「でも、白いお城で姫路城じゃないといったらもう、思いつきませんよ」
正本人さえよくわからないのならお手上げだと、き江は思った。

「そうかなあ」
正は腕組をしながら言う。

「「んにはー」」
玄關のほうから元気な孫たちの声が聞こえた。

「あら、もう美央ちゃんたちが来たわ」
今日は夏休み中の孫たちをみる予定だった。来ると言っていた時間は、朝の九時。き江が時計を見ると、時計は九時二〇分を指していた。

「いらつしやい、美央ちゃん、翔君。まあまあ、汗をいっぱいかいて。今タオルをもってきますね。部屋の中はエアコンついているから涼んでね」

「「はーい」」
き江は洗面所にタオルを取って、居間へと戻る。扉を開けると、廊下に少しただけでベタついた体が、エアコンの風でスツと冷える。

「ばあちゃん、外暑かったよ」
暑さで真っ赤な顔をした翔が言った。

「ほんとに、そうだよねえ。二人とも麦茶飲む？」
「飲むー」

美央が答える。

「僕、オレンジジュースがいい」

翔が言った。き江は二つのガラスのコップに氷を入れ、それぞれに、やかに作っておいいた麦茶と、ペットボトルの100%オレンジジュースを入れる。

「はいどうぞ」
「はーい」

「ばあちゃん、ありがと」
「ハー！ 美味しい」

翔は一気に三分の二を飲み干す。
「今日は何時までいるんだい？」
正が聞く。

「自転車で来たから、暗くなる前には帰りたいな。五時半くらいかな」
美央が答えた。

「よし、それじゃ、午前中は図書館に行つて勉強をして、午後はみんなで遊びましょうか」
正が二人に言う。

「「はーい」」

少し涼んでから、図書館に行く準備をする。美央と翔はリュックを背負い、き江は小豆色のクロッシェを被って、バックに貴重品と水筒を入れる。正は先に車に向かって、エアコンを入れた。

四人で車に乗り、図書館へと向かう。

「春とか秋とかだったら歩いて行けるけど、夏だとこの距離でも車を使いなくなるよね」
美央が言った。図書館までは車を使うと、たったの五分程度で着く。

「ほんと、今年の夏は暑いよね。図書館は涼しいよ」
き江は答える。

図書館に着いて美央と翔は夏休みの宿題を進めるため、自習室に向かい、正は地図が保管してあるコーナーに向かった。それを見て、き江が正を追いかけて聞いた。

「正さん、何か調べるんですか？」

「ほら、さっき話していたお城を調べようと思ってね」

「そうですか、なら私も一緒にやりますよ」

「ありがと、き江さん」

「とはいっても、どこから調べましょうかねえ」

「さっき思い出したんだが、その城つてのは、アメリカに居たときに訪れた気がしたんだよね」

「まあ、それじゃあ姫路城のわけありませんね。というか、外国のお城なんて白いのばかりじゃなですか」

「だから、アメリカの地図で探そうと思ってね」

「普通の地図から探しても、地図記号やお城の名前からいしか載っていないんですから、光景でしか覚えていないんじゃないかと探して当てるのは難しいですよ。それに、アメリカといっても、とても大きな国なのでしょ？」

「そうさそうさ。アメリカは日本よりも、うんと大きいんだ。そうだね、何で探そうかね」

「そう話す正は殊の外、嬉しそうさ。」

「そうだ、ガイドブックがいいのではないですか？」

「旅行本か。そいつはいい」

「じゃあ、持ってきますね」

持つてくると言ったものの、き江はガイドブックを借りることはほとんど

ないので、どこにあるのかと迷っていると、司書さんがき江に教えた。

「ガイドブックのコーナーはこちらですよ」

「ありがとございます。とても助かりました」

「いいですよ。これが仕事ですから」

優しい司書さんなどと、き江は思った。

「旅行に行く予定があるんですか」

「いえいえ、少し調べ物でもしようと思ひまして」

「そうなんです。ガイドブックは写真もいっぱいですから、見ているだけで楽しいですよ。では、ゆっくりしてってください」

「ありがとございます」

き江は出版社の異なる三冊のアメリカのガイドブックを持って、正がいるところに戻った。

司書さんの言った通り、ガイドブックは想像以上に面白く、お城やその他にも色々見ていると、あつという間に十二時になった。

「もう十二時じゃないですか。美央ちゃんと翔君を呼んできますね」

き江が二人がいる自習室に向かうと、美央は難しい数学の問題でも解いているのか、『(1)』とだけ書かれたノートを前に頭を抱えている。翔はというと、夏休みのワークの上で眠っていた。ワークがよだれで汚れていないかと心配するほどの爆睡っぷりだ。二人ともき江が来たことには気づかない。き江は二人の肩を後ろから優しくトントンと叩く。

「わあ！」

翔は驚いて声を上げる。

「あ、おばあちゃん」

美央は振り返って言った。

「十二時も回りましたし、そろそろ帰りましょうか」

「はい、」

家に帰ってきて、き江は、お昼ごはんは素麺をゆでる。

「ばあちゃん、何か手伝おうか？」

美央が言う。

「じゃあ、冷蔵庫の糠床からキュウリとミニトマトを出して、洗ってくれる？」

「はい。糠床って、この黄色い袋？」

「そうそう。洗ったら、キュウリは食べやすい大きさに切ってほしいな」

「オッケー」

「僕もなんか手伝う」

手を洗ってきた翔が言った。

「ありがと。じゃ翔君はさつき買ってきた天ぷらお皿に出してくれる？」

「うん」

その間に、正はみんなのお茶を注ぎ、お昼ご飯はものの十五分程度で完成した。

「二、いただきます」

スルスルツ

「やっぱり夏は素麺だよ」

美央が言った。

「そうだよな。そういや、ばあちゃんとじいちゃんは図書館で何やってたの？」

翔が聞く。

「お城を調べてたんだ」

正が答えた。

「お城？」

「じいちゃんがね、昔訪れたお城に行きたいって言うんだけど、分かるのが白色でアメリカにあるってことだけで、そのお城が何のお城なのか分からないの。じいちゃんは見たら分かるみたいだからガイドブックでお城調べていたんだよ」

簡潔すぎる正の答えに、き江は説明を加える。それを聞いた美央が言った。

「そうだったの。それなら、私が今グーグルで調べよっか？」

「インターネットか。それは考えなかったね」

正が頷きながら答えた。美央はスマホを取り出して、素早く『アメリカ お城 白色』と検索する。

「どう？ じいちゃん、それっぽいのある？」

「んー、ちよつと待ってくれ」

正は席を立ち、老眼用のめがねを取ってくる。美央からスマホを受け取って、画面をスクロールしながら見るが、目当てのお城は見つかっていないようだった。

「これも……これも違うね。頭にはハッキリ浮かんでいるから、見ればわかると思うんだけど。ありがと、美央ちゃん」

そう言つて、正は美央にスマホを返した。

「そっかー、残念。あ、そうだ。話は変わるけど、春休みにね、家族旅行でアメリカに行くんだ。この前、アメリカのお菓子あげたでしょ。あれ、友達がアメリカに行ったときのお土産のお裾分けだったんだけどね、その友達のものすごく楽しかったって言うから、私もアメリカ行きたいってママに話したの。そしたら春休み行くことになったんだ」

美央が嬉しそうに話す。

「あら、美央ちゃんと翔君もついに海外デビューね。土産話たくさん聞かせてね」

き江は言う。

「僕、外国ちよつと怖い」

ボソツと翔が言った。

「いやいや、アメリカは楽しいぞ。なんでも大きいんだ。ビックサイズだ」

「正が楽しそうにアメリカのことを話し始めた。」

お昼ご飯がひと段落して、午後は何をしようかという話になった。美央がアメリカの映画のDVDを持ってきたというので、それを見ることになった。

「そのアメリカ行った友達、洋画が好きでね、貸してくれたんだ。結構有名な映画らしいよ。『市民ケーン』だって」

「初めて聞いた」

「それは翔が洋画に興味ないからでしょ。友達曰く、不朽の名作なんだって」

「とりあえず、早く見ようよ」

ソファーに三人座り、き江は食卓から椅子を持ってくる。見始めると、当たり前だが音声は全部英語だ。字幕を追いながら、映画を見る。

見終えて、約二時間のその映画は、『不朽の名作』といわれる評判に劣らず面白いと、き江は思った。

「面白かったですね」

き江は素直に感想を言う。

「うん、うん、私もそう思う」

正も満足そうだ。

「ばあちゃんたち、すごいね。話の内容わかったんだ」

「僕、話よくわからなかった。そもそも、白黒でさらに、英語って時点で、なんか難しい」

見終わったので、美央はDVDをケースにしまう。

「あ、それだ!!」

正が突然、机に置かれた写真を指差して言った。

「え、この写真がどうかした？」

その写真には美央がDVDをしまおうとして、ケースの中に入っていたんで、机に今、出したものだ。美央が不思議そうにその写真を正に渡す。

「私が探していた城はこれだよ」

その写真には、白い豪華な邸宅とその前に噴水が写っていた。

「まあまあ、なんて偶然。これが正さんが言っていたお城なんですね」

き江はとても驚いて言った。

「あ、写真の後ろにメモがあるよ。『市民ケーン…ハーストキャッスル』だつて」

美央が言った。

「こんなこともあるんだな」

翔もびつくりしているようだ。美央が『ハーストキャッスル』とグーグルで調べると、そのお城は、先ほど見た『市民ケーン』の主人公のモデルとなった新聞王が建てた、カルフォルニア州にある豪邸らしい。

「カルフォルニアっていったら、今度僕たちが旅行で行く州だよ。ねえ、じいちゃんがお城行きたいんだったら、春休みの旅行、じいちゃんとはあちちゃんも一緒に行けばいいじゃん」

「いいね、翔。ナイスアイデアだと思う」

「確かに。私はぜひ、もう一度訪れたい。き江さんはどうですか」

正は翔のアイデアに子供のようにワクワクしているようで、それがき江

にはとても可愛らしく感じた。

「アメリカですか。ふふふ、この年になって初めての経験ですね。楽しそうですね、私も行きたいです」

「き江が外国に行ったのは、正と新婚旅行にタイに行った一回だけである。

「じゃあ、ママにあとで相談してみるね」

家に帰って、美央が相談したらしく、その日の夜には、お義母さん、お義父さんも是非一緒に行きましよう、という連絡がきた。

三月下旬。早いところではもう桜が咲いているらしい。電車を乗り継いで成田空港まで行き、そこからアメリカへと飛び立つ。飛行機は慣れないこともあってか、ひどく疲れたが、無事、みんなでアメリカに到着した。

外国ならではの、言葉が通じないことや、財布を盗まれそうになるハプニングもあったが、一日目、二日目と楽しくみんなで過ごした。そして旅行の三日目、『ハーストキャッスル』に訪れる。

『ハーストキャッスル』は美しかった。天気は澄み渡るような青い、青い空で、前にある噴水はうつつらと虹をかけている。左右対称の豪華な建物で、上の塔のような部分にはタイルがはまっており、太陽の光を反射する白い外壁はまぶしいくらいだった。

「何十年ぶりかな。なんだか若返った気分だ」

正が昔を懐かしむように言った。

「これがハーストキャッスル。ほんとに綺麗ですね。来られてよかったです」

き江は言う。

「わあ、実物はやっぱり違うね。写真で見ると、ずっとずっと素敵」
美央も楽しんでるようだった。

建物の中に入ると、繊細で美しいタイルがびっしりはめられていたり、アンティークな調度品がそのまま残されていたりしていた。

屋外にある、ネプチューンプールという場所に行ったとき、正が話し出した。

「そうだそうだ。このあたりで、じいちゃんは若いころ、アメリカのべっぴんさんに話しかけられたんだ」

「えー!! じいちゃんイケメンだったの?」

「ははは、そりやまあ、モテたよ」

「ばあちゃん、本当?」

「うん? まあ、そうなんじゃない?」

正はアメリカの話をよくするが、その話を聞くのは、き江は初めてだった。正と美央たちは若いころの正の話に盛り上がっている。

その正が話す『べっぴんさん』というのはどんな人だったのだろうか。この年でもやはり少し気になるものなのだな、とき江は思う。

「もう少し早く、正さんに出会っていればなあ」

き江はボソッとつぶやいた。

雄大な山々が私を見下ろしている。周りには誰もいない。自分達の住処に侵入者がきたことを仲間知らせるかのように野鳥の音が山全体に響き渡り、甲高い鳴き声が私の鼓膜を劈いた。正直言って、五月蠅くて敵わない。もっと静かなところにすべきだった。だが、もう後には引けない。こししかない。鳥たちの喚き声に辟易しながらも、私は歩を進めた。

昔から、静かな彼女が好きだった。例えば、図書館。また例えば、美術館。ここにはいつも彼女がいた。私は、毎日のように通い詰めていた。絵画や本は見ずに、ただそこにいる彼女に見惚れていた。壁に掛けてある時計の音だけが聞こえてくる空間。絵の雰囲気を出すために造られた真っ白な部屋が持つ空質感。私はそれが大好きだった。しかし、今はどうか。昔は良かった。街中を歩いても分かりづらいつとはいえ彼女に会えた。私と彼女は日々の日常の中に溶け込んでいた。けれど今は、一度外に出てみれば猥雑な雑音が其処ら中に溢れている。どこの誰かも知らない奴らの笑い声が、聞きたくもない至極どうでもいい話が嫌でも耳に入ってくる。聞きたびに吐き気がする。もう、うんざりだ。だから私はここに来た。

紅く染まりかけた落葉を踏み分けて、山を登って行く。この山は舗道された道はなさそうだ。枯れ木の葉や虫やらが身体中にまとわりつくが、気にも留めずに上り続ける。木の根が触手のように地面にうねり散らかしているのを踏みしめ、尖った岩肌を登り始めた。ロッククライミングは得意じゃない。そもそも、運動が苦手だ。学校の授業で一番体育が苦手だった。いつも評価が一番下で、私が何かすればするほど回りの奴らから笑われ、冷たい視線を浴びた。そんなこともあつてか、わざわざ学校で持久走や体力テストを

やる意味は未だに理解できない。運動会も嫌いだった。何故貴重な休日を一
日無駄にしてまで疲れなければいけないのか。周りの奴らは青春だの一体
感だのなんだのをほざくが、そんなものは全部嘘だ。所詮はただの綺麗言で
しかない。けれど、私の考えに共感してくれるやつは周りには誰もいなかった。

『持久走だけは嫌だわ〜w俺w』

『球技とかマジでダルいんですけど』

『はあ……動かたくない……』

皆々こう口にするくせに結局は楽しんでる。何が「嫌だ」だ。この裏切り者め。一度口にしたならその言葉には責任を持つべきだ。軽々しく声に出すな。このようなことがあつてから周囲の人間に深く失望したのと、持ち前の人嫌いがあるせいで自然と私の周りには誰も近寄らなくなつていった。教師も、実の両親も。

そんな私を救ってくれたのも、やはり彼女だった。

静かな場所は、静かな場所なだけあつて人気はなく、ましてやそこは片田舎のようなどころにあつたから、私が行ったときはいつも人がいなかった。

それは、大樹だった。辺りが田んぼだらけのなかにポツンとそびえたつ立派な大樹だった。そこに、彼女がいた。大樹は木の枝が広々と伸びて、木陰ができていた。私はその木陰に潜って、若葉が風に揺れる音を聞いていた。

シヤラン、シヤランと葉が揺れる音が静かで心地よい。この大樹は自分が住んでいる場所の近くにあり、気軽に寄りやすいのもあつて、図書館や美術館に行くまでは学校帰りに必ず寄つていた。最近、あの音をふと聞きたくなり、昔の記憶を頼りに久しぶりに大樹のもとへと訪れた。

大樹は、私と彼女の思い出の場所だった。

大樹は、真つ二つに切られて、すでに切り株となっていた。

今日も世界に音が多すぎる。お気に入りの場所が朽ち果てている。彼女は何処に行ってしまったのか。何処を探してもいない。君は見当たらない。わからない。どうして消えてしまったのか。わからない。分らないことばかりが増えて、私を覆い尽くす。目の前が暗い。光がない。何も見えない。私がおこへ来たのは半分賭けでもあった。ここなら、彼女がいる気がした。

ゴツゴツとした岩のゾーンを登り切り、どうにかして再び地面に降り立つ。目の前を見ると、いかにも斜面が急な坂が続いていた。どうやら、この坂を登るとついに頂上に辿り着けるらしい。今の自分の状況と、周囲の景色とを考えて、私は確信した。

彼女が、頂上にいる。

ようやくだ。私はやはり間違っていないかった。私は賭けに勝ったのだ。そう思うと、不思議と消えていたはずの闘志が全身に駆け巡ってきた。一歩、また一歩と足を上げていく。先程の疲れは何所へやら、驚くほどに全身が軽い。ふと気付くと、私の両足は全速力で急勾配の坂を駆け上がっていた。この体力のない己の身体のどこにそんな力が残っていたのだろうか。いや、違う。あたりまえだ。ここを乗り越えたら、彼女に逢えるのだから。

坂を登り詰めた場所、すなわち、頂上には私の期待通りの風景が広がっていた。

目の前は断崖絶壁で、視界を遮る木々はなく、沈みかけた太陽が地平線に揺れ動き、最後の悪あがきと言わんばかりに自身の光をそこかしこに反射している。当然、私にもその光が当たって、後ろには影が出来ていた。山の

麓では感じなかった風の息吹も、ここでは少し強まっっていて、私の汗を撫でた。

私は耳を澄ました。

辺りからは風のそよ音しか聞こえない。

耳を澄ました。

野鳥の鳴き声は聞こえない。

耳を澄ました。

人の気配は感じない。

私が一人。ただそれだけだ。

愛おしい君よ。答えておくれ。

私は、ここにいるよ。

【……ただいま】

彼女の声が聞こえる。

遠く、光の向こう側から。

こちらを手招いている。

私のことを、呼んでいる。

【……ただいま……アナタ】

ああ、やっぱり君なんだね。

何処にいたんだい？

探したんだよ。

ずっと、ずっと、探していたんだ。

私は、君に会いたかったんだ。

【こちらにいらして……………？】

ああ、ああ、ああ！

今いくよ！

男は一人、風と共に宙を舞った。

お前と居られるなら、俺はどうなっても良かったのだろう。ひゅうと軽く吹いた風にさえも攫われてしまいそうなお前を、足にズキズキと伝わる冷たさも気にせず、俺の手を取って微笑んだお前を、俺は片時も愛さなかつたことはない。

所謂、片想い、という奴で、特に思いを伝えたことはなかつた。きつとお前はそんな風には思っていないだろうから。お前を悲しませたくなかつたというのは建前であつて、ただ俺が怖がりだつただけだつたのだと思ふ。思いを伝えたら、お前はもう俺を親友として見てくれはしないだろうから。

あの日、あの時、あの場所で。泣き腫らしたお前が俺を頼つてきた、その時に。安堵と喜びを第一に感じてしまつた俺を、どうか許してほしい。

それは冬の真つ只中で、空気に触れただけで鼻先が痛むような午後のことだつた。高校二年生ということもあり、学校生活にも慣れてきたからか、一年生の慌てた様子にほおが緩む。静かで落ち着いていて、何にも追われないう時間……この時間が俺は人生の中で二番目くらいに好きだ。

そんな時間を奪うように、廊下から如何にも「慌てています」というような足音が響き渡り、その音は次第に俺へと近づいてくる。誰かなんて分かきつていた。なんたって、俺の「一番」だから。

「やつと見つけたあ……どこ行つてたの、夏樹……」

息を切らした親友がこちらに走つてきた。彼の名前は大智。相変わらずインドアなのか、ちよつと走つただけで息を切らしている。かくいう俺は何をしてたかという、さつきまでは教室で読書に勤しんでいた。ただ、途中から読書で目が疲れてしまつたものだからと、一度教室を後にし、外でリフ

レッシュ……ではなく、廊下の窓を開けて涼んでいた。三階の教室からわざわざ一回まで階段を下りて、そこからグラウンドに出るなんてとてもじゃないが出来なかつた。

「お前は何で俺を探すだけでそんなに息を切らしてるんだよ……。俺は教室のすぐ近くにいたんだぞ？ 教室に居たお前なら俺が外に出たことくらい気付けるだろ……」

俺がそう呆れた声で言うと、彼はむすつとした顔をした。

「夏樹が出かけたとき、俺トイレ行つてたの！ 帰つてきたら夏樹が居なかつたから、俺、夏樹が神隠しにでもあつたんじやないかって……」

はあ、とため息をついた。呆れでもあるけれど、心配してくれたことの嬉しさを噛み締めたため息だつた。

そうか、心配してくれたのか。心の中で何度も反芻する。

「……神隠しなんてあるわけないだろ」

「でもさ、もしかしたらつて思つたら……」

「変な所で怖がりだよなあ、お前。大丈夫だつて、俺はお前を置いてつたりしないよ」

さり気なく、気づかれぬように愛を謳う。本当の意味では届かないだろうけれど。

「……ねえ。」

「ん？」

「俺さ……」

大智が口籠もっている。どうした、と聞き返すと我に返つたように目を見開いた。だがそれも束の間、すぐににはと笑つてみせた。

「んーん！ なんでもない！」

正直、薄々、あいつの家庭環境が悪いことには気づいていた。一緒に遊ぼうとしてもはぐらかされたし、昨日までなかった痣を作って家から出てくることだって……決定的な証拠や証言は出ていないけれど、俺が訴えればきつと、きつとあいつの親は逮捕されて、あいつは幸せになれる。何にも怯えず、笑って生きていける。……俺が、訴えれば。

もし、俺が訴えず見て見ぬふりをして、俺だけはお前を見捨てたりしないよと手を差し出したなら。お前は、きつと。

「夏樹？」

親友の声で我に返る。違う、何を考えてんだ、俺は。

「あー、いや……」

明日には言おう。いや、やっぱり明後日に。

「明日こそ、お前とゲームでもして遊びたいなって、考えてて」

ああ、なんて最低な奴なんだろう。罪悪感に苛まれても、それよりもずっと強く、隠し通せたらな、なんて、身勝手で残酷な考えをしよう。そして笑いそうになってしまいそうになる。あーあ、なんて哀れな奴。それで特別可愛い奴。

どうか気づかないでいて。愛しているから。

寒さはまだ続いていた。確かこの前から三日程たった。過ぎ去っていく一日一日に、少しの寂しさを覚えつつ、楽しければ良いかと目を瞑る。

ふと、ふわりと耳元のすぐ近くを通り抜けていって。空を見上げてみれば雪が降っていた。どおりで寒い訳だ、と独り言を言ってみる。返事は無かった。誰もいないような、やけに静かな通学路に違和感を覚える。あれ、いつもならばもっとこう……大智が俺に……

「どうした、だい……ち……ち……」

大智は、今にも泣きそうな顔だった。こぼれおちそうな涙を、必死に抑え込もうとしていた。俺に気づかれないよう、嗚咽も漏らさずに。鼻先が赤くなっている。寒さの所為じゃないことくらい理解できた。ぐ、と力の籠った唇と眉間に、ずつと耐えてきたのだと気づかされた。いや、違う。大智と出会ってからずっと、気づこうとしなかったのだ。俺の身勝手で、大智の SOS を受け取らなかったせいで、ずっと。

もう無理だと、いつか相談してくれるだなんて、甘い考えをってしまった。大智は人一倍我慢上手な奴だったのだ、悲しいことに。俺が啞然としていると、大智はようやく俺の視線が自分に向いていることに気が付いたようで、半ば飛び跳ねるようにして後退りした。

「な……何、ごめん。聞いてなかった。雪の話、だっけ」

バレバレだと自分でも判っているだろうに、それでも隠し通そうとする健気さに胸が痛む。ああなんで、なんで俺はこんなことを。後悔は募るばかりで、上手く言葉が出なかった。ただ、大智の震える体を抱きしめることしか出来なかった。大智は黙って受け入れていた。正確には、引き剥がすのも、反応をすることさえも出来ないくらいに疲れ切ってしまったのだろう。

暫くの間。数分とも数時間にも感じるような長い沈黙の末に、口を開いたのは大智だった。事情を全て話してくれた。力無く、零すようにして。

……大智は酷い虐待を受けていた。

知っていたよ、そう言いかけて必死に飲み込んだ。自己防衛であるのは確かだった。でもそれよりも、俺にまで裏切られていたと知ったら、大智はもう何もかもに絶望してしまうと思っただから、という理由の方が強かった。こうなることは分かっていただろうに。結局自分の都合に大智を巻き込んでしまった俺は、本当に最低な屑だ。

もう終わりにしたい、そう言った大智の目は真つ黒で。涙が光に反射してキラキラと輝く。曇りだからか、酷く鈍い光だった。その光は、僅かな希望は、俺に向けられているものだ。嘘つきでごめん。でもどうか、最期の最後まで、どうか俺に騙されたままで。

二人で手を取り合って、海へと足を運ぶ。浅瀬から着々と深さを増す海をつま先で歩いていく。バランスを崩すのは一瞬で、ぐらついた、そう認識した時には全身が水中に沈んでいた。一度全身を入れてしまえば、水圧は容赦なく押し掛かってくる。

でもそれで良かった。別に、この意思を変えるつもりは無かったのだから。ふと、大智の顔を見やる。

……笑っていた。心底幸せそうに。皮肉にも、今まで見てきた大智の笑顔の中で、一番幸せそうに微笑んでいた。だからもう、後悔は無い。お前を騙したその日から、どんな運命も共にしよう、決めていたのだから。

臥龍松、
文芸少女の、
こ・こ・ろ
いき！

せせらぎ 第189号

2025年7月18日 発行

編集・発行 群馬県立太田女子高等学校文芸部

〒373-8511 群馬県太田市八幡町16-7

群馬県立太田女子高等学校

部員 大南怜央 長山穂乃花

石原真奈美 藤崎沙彩花

牛久綾乃 永井滢 松澤咲良

顧問 吉田俊宏 早川由子

表紙 長山穂乃花

印刷・製本 有限会社長井製本所